



一般社団法人 第36回日本登山医学会学術集会を開催しました



開会の挨拶、会長講演を行った上小牧憲寛医師

6月4日・5日、上小牧憲寛大会長(当院救急科医師)のもと、栃木県総合文化センターにおいて、一般社団法人 第36回日本登山医学会学術集会を開催しました。栃木県では初めての開催であり、医師や研究者、医療従事者ばかりでなく、登山や高所での健康に関わる旅行者、山岳ガイド、遭難対策関係者など総勢約170名が参加しました。今回の大会テーマは「次世代の認定山岳医※のために」です。

発表は多岐にわたり、低体温症や凍傷といった寒冷による障害、紫外線や宇宙線による障害など循環器・呼吸器系を中心とする病態生理、登山や高所で起こる運動機能や神経機能などのあらゆる

障害をはじめ、山岳事故や山岳診療所について、また東京オリンピックの追加種目候補として注目を集めている「スポーツクライミング」に関することなど様々な発表が行われました。

※認定山岳医とは



山岳医とは、山でけが人や病人などが発生した際に現場まで行き病院に搬送するまでの間、患者のケアをする医師です。認定山岳医となるには、高所医学、山岳医学、旅行医学等に関する高度な医療知識のみならず、山岳環境でのサバイバルやレスキューに関する十分な技術があり、山岳救助関係者と共に活動ができ、万一の場合には、単独で下山できるレベルの登山技術が求められています。

その他、特別講演やパネルディスカッション、シンポジウム等多くのプログラムが行われました。大会終了後は、日本人初の8000メートル峰全14座の登頂者であるプロ登山家の竹内洋岳氏と山岳気象予報専門の会社を営む猪熊隆之氏をお招きし、市民公開講座「竹内洋岳の8000m峰14座登頂とそれを支えた猪熊隆之」を開催し、約200名の聴衆が集まりました。質疑応答では盛んに質問が飛び交い盛況のうちに幕を閉じました。



竹内洋岳氏



猪熊隆之氏(写真左)



済生会熊本病院へ診療救護班が派遣されました

4月14日、熊本県を中心として、最大震度7を観測した熊本地震が発生しました。これを受け、4月20日(水)～24日(日)の5日間、当院から済生会熊本病院へ診療救護班を派遣しました。以下に、被災直後の済生会熊本病院の様子を写真でお伝えします。



当院での出発式



病院内エントランスの様子



全国の済生会関連施設から届けられた支援物資



ミーティングの様子

実際に派遣された方にお話を伺いました！



お話を伺ったのは、
事務員 齋田さん(左端)

活動のほとんどの時間、全国の済生会の施設から届いた支援物資の整理の手伝いにあたりました。例えば食料品、飲料品は種類毎、賞味期限毎に整理されており、取り出しやすさ、賞味期限の管理といった点で工夫がみられました。整理が一通り済むと、職員へ支援物資の支給を行いました。栄養調整食品や飲料水のほか、賞味期限切れの水を生活用水として配りましたが、生活用水の水は個数制限無しで配っていましたが、1ケース6本入りを数ケース希望される方もおり、断水による生活への影響を改めて感じました。

物資を受け取った皆さまから「こんなに物資をありがとう。」など感謝の言葉を沢山頂きました。私は、ただ倉庫の整理をし、物資を配っていただけなので、申し訳ない気持ちになりつつ、少しでも役に立てたのかと安堵しました。

この度の震災等により被害を受けられた皆さま、またそのご家族さまに、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。